どこでもドアのかぎ 2018

特集　動物の本

新潟県立大学

2017 年度卒業／2018 年度入学記念

ほんものの本と出会うために

ほんものの本の中には、たくさんのものが詰まっています。

ほんものの本は、知識や理解を与えてくれるだけでなく、夢や、冒険や、驚きや、発見や、謎解きの楽しさや、感動や・・とてもここには並べきれないほどの、数々の贈り物を私たちに与えてくれます。ほんものの本は、たとえ手のひらに乗るほど小さくても、一つの世界を、一つの宇宙を持っています。

数え切れないほどの本の中から、ほんものの本をみつけてほしい。一人でも多くの人に、しあわせな出会いをしてほしい。そう願いながら、みんなで知恵を出し合いました。

どの本もそれぞれ、自分の世界を持っているなら、本の表紙、つまりその世界に通じる扉を開ければ、あなたはそのまま別世界に旅立てるのです。そう、まるで「どこでもドア」のように。

それでは、あなたの手で開かれるのを待っている扉たちをご紹介しましょう。

新潟県立大学生活協同組合
教職員フォーラム

どこでもドアのかぎ 2018　目次

山中　知彦　（国際地域学部 国際地域学科）..... 3
福嶋　秩子　（国際地域学部 国際地域学科）..... 4
Ka Po Ng　（国際地域学部 国際地域学科）..... 5
小谷　一明　（国際地域学部 国際地域学科）..... 6
若月　章　（国際地域学部 国際地域学科）..... 11
太田　正之　（国際地域学部 国際地域学科）..... 12
石川　伊織　（国際地域学部 国際地域学科）..... 13
小澤　薫　（人間生活学部 子ども学科）..... 20
黒田　俊郎　（国際地域学部 国際地域学科）..... 21
水上　則子　（国際地域学部 国際地域学科）..... 22

特集「動物の本」

神谷　睦代　（人間生活学部 子ども学科）..... 24
小谷　一明　（国際地域学部 国際地域学科）..... 25
石川　伊織　（国際地域学部 国際地域学科）..... 26
堀江　薫　（国際地域学部 国際地域学科）..... 27
柳町　裕子　（国際地域学部 国際地域学科）..... 28
水上　則子　（国際地域学部 国際地域学科）..... 30

国際地域学部　国際地域学科　山中　知彦

旅する音楽

仲野麻紀　せりか書房

本学図書館蔵書で読んだ本。著者はパリで活動する、自称ジャズ・アルトサキソフォニスト。いわゆる狭義のジャズというよりも、新たなワールドミュージックを追い求める音楽家で、興行としてのあるいはエンターテインメントとしての音楽ではなく、研究や実験としての音楽を生きようとしているように見える。その彼女が西アフリカのブルキナファソのパンフォラ村で立ち会った音楽を契機に語る。「楽師は死者の硬直した肉体を緩めるため、10 日以上、連日奏でたそうだ。・・・(中略)・・・死者はもう踊らない。血の通わない物体。ただし魂が漂っている。彼らは、死者の肉体的苦しみから魂を解放し、魂を癒すために奏でる。アニミズム、アニマ＝霊魂」(p42)、「しかしアニミズムという言葉自体は、西欧からの眼差しで捉える植民地時代の落とし子だ。アニマ＝霊魂。魂の世界が、音によってこの世に現れる」(p50)。さらに佐渡でのオンデコを訪ね、「佐渡とパンフォラ村という、ローカルとローカルの関係。なぜわたしたちは、西欧経由のアフリカ音楽としてでしか彼らの音楽を知ることができないのか。・・・(中略)・・・成熟した社会とは、西洋からの批評によって左右されるようなものではないだろう」(p86)。武満徹からレヴィ・ストロースまでの縦横無尽な引用を駆使し、平均律というクラシック音楽の根幹を問い、世界の欧米化の結果としての現代の文化の意味を問う。クラシックを相対化する延長上に、欧米的価値観によって否定あるいは民族音楽として矮小化されてきた世界各地域の音楽の意味の復権を説く。演奏活動を行うための旅の中での思索をまとめた刺激的な書誌。確かに私の愛聴するジャズの根源には、アフリカからアメリカに売られてきた黒人たちのアニマ＝霊魂が封印されていたはずだ。また、私は今でも傑作だと思う 1970 年の反戦・平和・民族解放戦線への賛歌『リベレーション・ミュージック・オーケストラ』などは、彼女の音楽観にとって果たしてどのような意味を持つのか？「・・・エキゾチックという先入観の中で旅することの虚しさ。旅は行き当たりばったりでいい・・・」(p168) という彼女の言葉が、私自身の旅を刺す。

国際地域学部　国際地域学科　福嶋　秩子

ちいさい言語学者の冒険　子どもに学ぶことばの秘密

広瀬有紀　岩波科学ライブラリ（岩波書店）

自分の子どもがことばをしゃべり始めると必ず言語習得記録をとりたくなるというのは言語学者あるあるですが、それを元に書かれた本です。今どきですから、SNS やらブログやらで子どもの「言い間違い」を発信する人は言語学者に限らず多いようです。しかし、子どもの言い間違いは、実は子どもが自力でことばを学んでいる証なのです。字を知らないからこそ、一般音声学の原理のようなことを子どもは身につけていたりします。また、大人がいくら間違いを指摘しても、子どもは聞く耳をもたないというのは、親がよく体験することです。子どもは規則を自ら構築し、その手持ちの規則を使って表現しようとします。著者のことばを借りれば、「子どもは自分でミツケル！」のです。母語である日本語を自由に使える人でも実は知らない日本語のいろいろな規則について、子どもから学ぶことができる本です。　【本学図書館所蔵】

ミッドナイト・バス

伊吹有喜　文春文庫（文藝春秋）

この小説が映画化され絶賛公開中です。私は映画を見た後で原作を読みました。映画では、家族の再出発を、深夜バスの運転手をしている父親に焦点をあてて描いていたように感じました。その後で原作を読むと、家族ひとりひとり、さらにサイドストーリーで描かれる家族の友人や知り合いなどの葛藤と再出発が新潟を舞台に細やかに描かれていました。映画も面白かったのですが、ぜひ原作の小説を読んでいただきたいと思います。　【本学図書館所蔵】

国際地域学部　国際地域学科　Ka Po Ng

Uncommon Grounds: The History of Coffee and How It Transformed our World.

Pendergrast, Mark　New York: Basic Books(2010)

Coffee is not only my favourite drink but also my favourite topic to illustrate human security issues and the development of globalisation. This book is a perfect match. It tells the story of the spread of coffee—the beans, the beverage, the culture and even businesses—from small local pockets to almost every corner of the globe. If you are interested in how coffee is connected with revolutions and guerrilla wars, why we have fair trade coffee, how Starbucks grows into a giant business and other intriguing coffee-related stories, then this book is your “cup of coffee.” Although it is written in English, it is presented in an easy-to-understand way. Now, pick up your book and coffee. Enjoy.

国際地域学部　国際地域学科　小谷　一明

夜の谷を行く

桐野夏生　文藝春秋(2017)

そうだった。3.11 の少し前に永田洋子が死んだのだ。「連赤（れんせき）」こと、連合赤軍と言えば、幼い頃の臨時ニュースの記憶。群馬県の浅間山荘に巨大な鉄球が振り落とされ、山荘の壁をくぼませていく映像。大好きな夕方のテレビドラマか何かを待ちわびていたのか、なんとも退屈で仕方なかった。雪深い山中の浅間山荘事件と霞ヶ関ビル爆破事件は少年期の映像記憶として心に残り、今頃にその内側をのぞき込むようになった。桐野夏生という作家、名前だけは知っていた。昨夏、書評を読んで購入。本に魅せられ、時間が消えた。山岳リンチを生き延びた女性をめぐる、予想だにしない展開。こういう本が読めたとき、天を見上げて感謝する。

＊図書館にあります

人間滅亡的人生案内

深沢七郎　河出文庫(2016（1971）)

人生案内とタイトルにあるが、読んで吹き出すことはあれ、何の役にも立たない。でも、悩みが吹き飛ぶは確かだ。なお、昨年、疲れたときに救われた洋書はサンドラ・シスネロスの『マンゴー通り、ときどきさよなら』（The House on Mango Street）。寝る前のひとときに、抜群の癒し効果がある。

男も女もみんなフェミニストでなきゃ

チママンダ・ンゴズィ・アディーチェ　くぼたのぞみ（訳）
河出書房新社(2017（2016）)

この一年、待ち望んでいた翻訳書の復刊や新刊にたくさんめぐり逢えた。アラブ文学の古典、カナファーニの『ハイファに戻って／太陽の男たち』の文庫本！韓国の山谷、かつての龍山を描いたチョ・セヒ『こびとが打ち上げた小さなボール』の完訳本。一方、アメリカ文学は何ともかんばしくない。ジェームズ･ボールドウィンのエッセイ “I Am Not Your Negro”の翻訳も、その映画公開の噂もない。一方、女性作家の翻訳は活発だ。ここで紹介するアディーチェの本、Kindleで原書が何と 100 円！ナイジェリアを離れて渡米し、20 代で作家デビュー。この本もまた良い。すぐにも授業でも使いたい。

ソヴィエト・ファンタスチカの歴史

ルスタム・スヴャトスラーヴォヴィチ
カーツロマン・アルビトマン（編）梅村博昭（訳）共和国(2017)

鎌と槌の切り絵がほどこされた真っ赤な表紙。ファンタスチカとは SF と幻想小説を含む文学ジャンルのこと。ロシア・ソヴィエトとソ連の 20 世紀は、まさに国家のトップが小説を読み、文化活動に目を光らせた時代。「セクション」という「文壇」も大変だ。変な小説がヒットしないよう、スターリン、フルシチョフの目を気にしなくてはならない。それにしてもソ連ファンタスチカの「文学史」は凄まじい。夢想さえも国家に奉仕すべく強制される「生産小説」の歴史なのだ。ここには英米の有名 SF 作家も登場する。ソ連こそ、SF の聖地だったからだ。それにしても、文学の空想がリアルになるよう奔走させられた科学者や官僚の姿は痛ましい。

私たちの星で

梨木香歩・師岡カリーマ・エルサムニー　岩波書店(2017)

タイトルに「星」の字が入る本は好きだ。筆者は今をときめく女性たち。この往復書簡、知らないことばかりで溜息の連続。シリアがトルコを越えたコーカサスと強い文化的紐帯を有していたとは。バター文化のエジプト、ロシア化しなかったグルジア・・・。星として地球を考えようとする梨木に文通を誘われた『イスラームから考える』のエジプトで長く暮らすカリーマ。ルーツは、モスクワ南東にあるロシアのカザン。そこから 20 世紀初めにタタール人が世界中へ離散し、彼女の生誕地、代々木上原にもモスクができた。なお、タタール料理やモロヘイヤ料理、カバーブ用のソースなど、食の話しもとっても楽しい。

＊図書館にあります

五色の虹　満州建国大学卒業生たちの戦後

三浦英之　集英社(2015)

上野英信という炭礦文学の泰斗が卒業生だったことから興味を持った建国大学。通称、建大は長春（当時は「新京」）にあった。エリート養成の超難関大学で史上希に見る国際的な大学だ。五族協和のスローガンのもと、5 民族の学生が 20 人単位の共同生活をおくった。「満州国」同様、8 年しか存続しなかったのに、「ケンダイセイ」（建大生）の絆は 21 世紀まで続く。驚いたことに、当初、建大では言論の自由が認められていた。また、建大生の戦後が実に面白い。冒頭でいきなり新発田の私の家の川向こうで暮らす方が登場。宮野泰さんという 80 歳半ばを越えてキルギス抑留の体験を本にまとめた方。ロシア語の学習を今も続けているという。『「勝ち組」異聞』（2017）で、ブラジル移民史家の岸本昂一も新発田出身と最近、知って驚いた。

＊図書館にあります

広島の樹に会いに行く

石田優子　偕成社(2015)

この一年で一番丁寧に読んだ本。石田優子さんは数年前に映画『はだしのゲンが見たヒロシマ』で監督デビュー。この本は広島の被曝樹木を扱った本だが、イラストや写真が本当に効果的で、ふりがなもうれしい。本作りでデザインや構成にこだわるのは、メッセージを真摯に伝えたいから。まさか、被爆樹木の種や苗を世界に送っている活動があるとは。森が原爆攻撃や原発事故の盾になってくれた側面があるとは。樹木医の説明、生存者や研究者の声、効果的な挿絵に美しい写真。何より樹木のことを学べるのがありがたい。木があの瞬間の記憶を後世に伝えていたのだ。石田さんは被爆樹木の映画を制作中。早く観たい。追記：山代巴の『この世界の片隅で』（岩波新書）がようやく復刊した。

うつろ舟　ブラジル日本人作家松井太郎小説選

松井太郎　西成彦・細川周平（編）　松籟社(2010)

ゼミ生のおかげで読み進められたサンパウロの日系移民による小説。「準二世」が主人公の作品が特に印象深い。2017 年 9 月、100 歳まであと 1 月というところで 1917 年生まれの松井氏は亡くなられた。また、ゼミ生に教えられて繙いたのが、垣根涼介の戦後ブラジル移民を描く『ワイルド・ソウル』、敬愛する角田房子の『アマゾンの歌』、石川達三の『蒼氓』（第 1 回芥川賞作品）。どれも面白かった。数年前に県大で授業をして頂いた岡村淳監督は、松井太郎のドキュメンタリー映画を撮っている。観たい。

＊図書館にあります

中国が愛を知ったころ―張愛玲短篇選

張愛玲　濱田麻矢（訳）　岩波書店(2017)

昨年２月に林京子さんが亡くなって、もう１年だ。新聞記者だった林さんの前夫や武田泰淳、堀田善衛は、戦中戦後の上海で異彩を放った「室伏クララ」や張愛玲と交友を深めている。クララや張愛玲は、魔都上海のシンボル的存在だった。映画『ラスト、コーション』（2008）で広く世に知られるようになった張愛玲だが、この短編集も素敵だった。横光利一の『上海』に近い、乾いた感覚の文体。そういえば、カズオ・イシグロも上海ものを書いていた。今年は上海の虹口に行ってみたい。今の４年生に市内の地図をもらったから。

国際地域学部　国際地域学科　若月　章

世界システム論講義－ヨーロッパと近代世界－

川北稔　ちくま学芸文庫(2016)

もし皆さんが書店に行って手に取った時、なんとも軽く小さな文庫本だなと思うでしょう。更にそんな装丁でありながらも案外高めの定価設定に驚くに違いありません。ところが一度本を開くと壮大な世界史に皆さんを誘ってくれます。本書は＜世界システム論＞という私たちの先人たちが大航海時代以降より今日まで続く歴史や国際関係が包括的な捉え方で映し出されています。本書は遠近両用の視野から政治や経済の視点で描写しながら、時にはヒト、モノ、カネ、情報の他、金融や技術の影響を巧みに取り上げ、今日の国際社会の現況や未来の見据え方のレッスンが次第に身についていきます。今日の国際社会がどのように成立したのか是非概観してください。

本書を読み進めていく内に一見ヘゲモニー国家の興亡史を描いているかのように見えて、実は歴史を「国家」単位で見ることの誤りに容易に気づかせてくれます。大学に入学すると世界各地域の現状や将来を様々な学問分野から学習することになるでしょう。そのためにも先ずは近代以降の世界の仕組みに関する基本的知識を本書によってひと通り学習されることをお薦めします。歴史の科目を苦手とする皆さん、大学の講義を受けるのに不安を持っている皆さんも是非勇気をもって本書に挑戦してみてください。読了後にはきっと見た目とは違うよりスケールの大きな知識が得られたことに満足し、当初感じた値段の高さへの不満も解消される筈。このような期待を大きく裏切る書籍は他にありません。因みにこの文庫本はかつて放送大学の歴史分野の講義で使用されたテキストが基になっていることもあわせてお伝えします。

国際地域学部　国際地域学科　太田　正之

翻訳夜話

村上春樹・柴田元幸　文春新書（文藝春秋）

柴田氏の勤務先である東京大学教養学部の翻訳ワークショップに、村上春樹がゲストとして参加したことがきっかけで本書が生まれた。ワークショップの対象は大学生や翻訳を志す若者達なので、みなさんも共感できる部分があるのではと思います。村上・柴田両氏の「競訳」も楽しめます。

ロックの英詩を読む

ピーター・バラカン　集英社インターナショナル

テレビやラジオを中心に活動しているブロードキャスターのピーター・バラカン氏がロックの歌詞をとりあげ解説したものです。『English Journal』（アルク）に連載していたコラムで紹介した曲が中心です。類書である大修館書店の『ロックの心１，２，３』はどちらかと言えば「歌詞を利用して英語を学ぶ」という内容でしたが、こちらは「歌心」をより大切にしているようです。ロンドン生まれのバラカン氏でも解説に苦労する歌詞もあるようで、ちょっと安心しました。

国際地域学部　国際地域学科　石川　伊織

江戸東京たてもの園　解説本　収蔵建造物のくらしと建築

江戸東京たてもの園（2016 年）

昨年の秋、ゼミの学生とジブリ・ツアーをしました。耳すまの丘に登って、ジブリ美術館に行って、七国山病院（本当は東京都東村山市と埼玉県所沢市の間にある八国山とその麓の結核療養所）の裏山に上りました。で、時間があったので、移動の途中で東京都小金井市にある江戸東京たてもの園に寄り道。大正時代になってから作られたのに、どう見ても江戸時代のものとしか思えない元宇和島藩主伊達家の門があります。宇和島の伊達家は仙台の伊達家の分家です。コルビジェの弟子の前川國男の自宅・アトリエもあります。2.26 事件で暗殺された高橋是清の自宅も移築されています。この自宅の二階の床の間の前で、彼は暗殺されました。その部屋の窓ガラスは当時の製法で作られた波打った吹きガラスです。足立区千住から移築された銭湯の子宝湯は、『千と千尋』の湯屋のモデルです。カオナシが縁側から湯屋に入ろうとするあの場面ね。新潟にはない、東京独特の、寺院のような作りの重厚な銭湯は見ものです。この解説本は、写真と文章でこの園に移築された古い建築物を紹介していますが、全部の建物に平面図が添えられているのが楽しいですよ。

地図で読む戦争の時代　描かれた日本、描かれなかった日本

今尾恵介　白水社(2012 年)

地図は嘘をつきます。戦前の日本には「軍機保護法」という法律があって、軍事機密＝軍機に指定されると地図でもなんでも、書き直しが要求されたのでした。明治時代の東京の地図には皇居の中の吹上御苑の中の等高線や建物が精密に書き込まれているのに、大正 5 年の同じ場所の地図では真っ白です。何もないことになっているのです。第二次大戦中に毒ガスを製造していた瀬戸内海の島も、軍事機密に指定されて、周辺の瀬戸内海ごと真っ白にされてしまいました。そうかと思えば、きわめて正確に、戦争の痕跡を示す地図もあります。戦前の名古屋市の地図には繁華街にたくさんの建物が存在したことが書き込まれていますが、昭和 22 年の地図では、名古屋城の南側の繁華街が真っ白になっています。焼野原になってしまたのですね。こういう古い地図を集めて、そこから戦争の痕跡を探そうというのが、この本の主題です。今尾さんはほかにも、古い地図と観光案内図を材料に、いろいろな本を書いています。興味があったら探してみてください。

日本史を学ぶための〈古代の暦〉入門

細井浩志　吉川弘文館(2014 年)

暦には太陽暦と太陰暦とがあります。純然たる太陽暦というのも、まったくの太陰暦というのもあまり現実的ではなく、何らかの形で両方の要素を組み合わせているというのが、歴史的にみてこれまで成立していた暦の常でした。同様に、時刻の数え方にも定時法と不定時法があって、これなどは特に深く機械工業の発達と関連していました。ヨーロッパ諸国では、機械式時計の発明と普及が定時法の採用を促進しました。それでも地方ごとのローカル・タイムは使い続けられます。これが全国統一の標準時に改められたのは、鉄道の開通後でした。地域ごと、街ごとに時刻が異なっていたのでは、長距離を短時間で結ぶ鉄道は安全に運行できないからです。ところが、日本では、機械式時計が輸入されて広まっても不定時法はそのままでした。それどころか、不定時法を計測できるように、機械式時計を改造してしまったのです。ですので、機械式時計：定時法→鉄道：標準時という図式が日本では成り立ちません。明治に入って鉄道を敷設しなくてはならなくなった段階で、一挙に、定時法と標準時を定め、ついでに太陽暦を導入してしまったのでした。これが明治 5 年のことです。ではその前の暦はどうなっていたのでしょうか。残念ながら、つい 150 年前のことなのに、私たちは忘れてしまっています。歴史を知りたかったら暦の知識は不可欠です。例えば、なぜクリスマスは 12 月 25 日なのに、イブの方が重要なのか？これは、イエスの時代のユダヤの暦では、一日は日没から始まることになっていたからなのですね。イエスが生まれたのは、ユダヤの暦では 12 月 25 日なのだけれど、今の一日の数え方に合わせると、12 月 24 日の深夜になってしまうのです。暦を理解するには天文学を知らないといけません。理系だ、文系だと言っている場合ではないのですね。さて、勉強しましょうか？！

新潟市民文化遺産　ガイドブック

新潟市（？）

　さて、発行年は何年なんでしょうか？出版社も書いてありません。でも、これは立派な書籍ですね。248 頁もあって、新書版よりもおおきい、フルカラーの観光ガイド。市役所や区役所や、市の文化施設に行くと無料で配布されてます。いやあ、新潟市内にこんなにも文化財があったのか（！！）という驚きと、でも、わたしの知ってるアレはどうして文化財扱いしてもらえていないのかな、という疑問がわいてきます。先日も、大学へ向かうバスの窓から外を見ていたら、蒲原町の栗木バイパスとの交差点の北東角のところに道路へ登る数段の階段を発見。そのすぐそばの料理屋さんの看板に「川岸」の屋号を発見。石段は、栗木バイパスが栗木川の本流だった時の自然堤防の名残ですよね。あの広い通りがそのまま河だったわけです。だから、その自然堤防に面して建つ、昔は瀟洒だったであろう料理屋さんは屋号が「川岸」というわけです。これって、立派に文化遺産じゃないでしょうか。明鏡高校と万代高校の周りの道路には、昔の鉄道用地であったことを示す赤字で漢字の「工」の字が彫り込んであるコンクリートの杭がたくさん打ち込まれています。この近所に、今から 120 年前に開通した北越鉄道（現・信越本線）の終点だった旧沼垂駅があった証拠です。これも文化財じゃないのかしら。みんながたった 100 年前のことをどんどん忘れてしまうので、一コト言っておきたい！と思うのでした。ところで、良くできた案内冊子なのですが、写真のミスプリントが二か所もあって、カラー写真入りの訂正の紙が二枚も挟まっているのが残念。

はじめアルゴリズム（第 1 巻・第 2 巻）

三原和人　講談社(2017 年)

　マンガです。数学少年のお話し。老人になって大学も定年退職した後、誰も話を聞いてくれないとふてくされている過去の天才数学者が、廃校になった自分の母校の廃墟で、独り数式を書き続ける少年を発見します。この子の天才を見抜いたかつての天才数学者は、少年に数学を教え込もうとして、どんどんと常軌を逸脱していきます。この後、物語はどのように続くのか、第 2 巻が待ち遠しいところ（アッ！　アマゾンで調べたら、もう出てるんだって。さっそく買わなきゃ）。

てっぺん（第 1 巻）

日下直子　小学館(2017 年)

　新潟が生んだ天才漫画家の最新作（！！）　私のゼミの卒業生なんですよね。『てっぺん』は、悪行のために高校を首になったヤンキーで不良のボンボンが、人の話を最後まで聞かないばかりに、転校先に選んだのが「報徳高校」。彼は「放蕩高校」だとばっかり思っていたものだから、これから悪さのし放題だと喜び勇んで入学するも珍事の続出。例によって、にやにや笑いが昂じて爆笑に至るという、日下節です。今では日下先生もお母さん。つわりの真っ最中にこんな爆笑ものの作品を描いていたというのですから、ただものじゃないです。

美少女の美術史

「美少女の美術史」展実行委員会編　青幻社(2014 年)

地方の美術館が元気です。青森県立美術館・静岡県立美術館・島根県立石見美術館の 3 人の学芸員が企画した「美少女」を扱った美術展の図録です。江戸初期の障壁画から鈴木晴信、喜多川歌麿、さらには中原淳一、林静一を通って初音ミクまで。こう言ってしまうと、男性の作家が「美少女」を描き続けてきたというふうにも見えるのだけれど、女性作家もたくさん出てきます。少女マンガも、ポスターも、フィギュアも。企画をした 3 人の学芸員のコンセプトは「美少女なんて、いるわけないじゃない」なんだそうなのだけれど、こうしてとんでもない規模の展覧会ができてしまうということは、実は日本は美少女だらけなのかもしれません。これはどういう現象なんでしょうか？　真面目に研究する価値がありそうです。

仏果を得ず

三浦しをん　双葉文庫(2011 年)

以前はたびたび人形浄瑠璃＝文楽を観に、半蔵門の国立劇場に行っていたのですが、新潟に来てからはとんと足が遠のいています。大阪の国立文楽劇場に行った方がいいかなと思うくらい。何しろ、文楽は大阪が本場ですからね。ですが、このお芝居というのが、良くわからない筋書きなのです。近松の『冥途の飛脚』だとか『曽根崎心中』ならまだわかるのです。好いた惚れたがうまくいかなくなって、その結果の心中ですからね。ところが、『義経千本桜』だとか『妹背山婦女庭訓』だとか『菅原伝授手習鑑』に至っては、敵と見せかけて実は忠義の士だとか、とんでもない DV 親父と見せかけて実は殿様への忠義と家族愛に引き裂かれた正義の味方とか、筋書きはめちゃくちゃです。『仮名手本忠臣蔵』のお軽・勘平だって、「〇〇とみせかけて、実は……」の典型です。『義経千本桜』では、死んだはずの平家の公達が生きていて、それが平家の再興を図るとか、佐藤忠信が狐だったとか、何が何だか訳が分かりません。でも、それが面白かったりするから不思議です。忠義と情というのを江戸時代の人たちはどう考えていたのでしょう

か。三浦しをんの小説は、若い文楽の大夫がこの訳の分からなさに悩んでいるところへもってきて、ハチャメチャで暴力的なお師匠さんにいたぶられたり、小学5 年生の女の子とそのお母さんに同時に惚れられてしまったりと、お得意の三浦節。

君たちはどう生きるか

吉野源三郎　岩波文庫

以前にも紹介したことがありますが、改めて。法政大学の経済学部で倫理学の講義をはじめて持つことになった時、教科書に選んだのが、原作の方のこの本でした。戦前の、軍事色が強くなっていく世相の中で書かれたこの本を通して、さて、現代の課題とは何で、それに対して君はどういう態度決定をし、どういうスジを通すつもりなのか、と訊いてみようと思ったのです。そもそも、経済学というのは倫理学の一分野ですから、経済学部の学生を相手にこういう話をするのも意味があるだろうと考えたのです。それが昨年、マンガになって大ヒットしているというではありませんか。私の授業計画は時代を 30 年も先取りしていたようです（自画自賛！！）。岩波文庫版は解説を丸山真男が書いています。吉野源三郎が戦前の思想家の代表だとすれば、丸山は戦後の一時期の日本思想をリードした思想家でした。この二人の組み合わせは熟読に値します。マガジンハウスのマンガ版も、よく頑張ってマンガにしたとは思います。でも、肝心な部分は原作の文字で書かれたテキストのままです。裕福な家の子どものコペル君（コペルニクスに因んで叔父さんがつけたあだ名）が学校や社会で経験するいろいろな出来事に対して、叔父さんのノートという形で、抽象度の高い分析や教授が行われていく、という筋書きなのですが、この「叔父さんのノート」のところは、さすがにマンガにはできなかったようです。コペル君の発見に対する叔父さんのコメントが絶妙です。そして、この叔父さんの説明の仕方を解説する丸山真男の文章がなかなかに含蓄に富んだものなのでした。「どう生きるか？」と問われたら、あなたならなんと答えますか？

人間生活学部　子ども学科　小澤　薫

健康で文化的な最低限度の生活

柏木ハルコ　小学館

大学を卒業して市役所に入庁した主人公のえみるさん。配属された先は、生活保護の現業員（ケースワーカー）。福祉職はもちろん一般職も配属されます。ちなみにえみるさんは一般職。全国的にも新卒 20 代の比率が高い職場です。丹念な取材をもとに生活保護についての一方的な報道とは異なるリアルな生活保護利用者の生活実態、職員の葛藤が描かれています。新潟市内にも登場人物のモデルとなっているケースワーカーがいます。第 6 巻はアルコール依存症。複合的な課題を抱えた利用者、それを支える担当ケースワーカーと同僚たち。人と人とのかかわりのなかで、生きる道をともに考えていく。素敵な仕事だと思います。

国際地域学部　国際地域学科　黒田　俊郎

蜜蜂と遠雷

恩田陸　幻冬舎(2016 年)

慣例に従って専門書以外で一冊推薦しよう。
さてなにが良いだろうか？
この一年、個人的な楽しみとして読んだ本は、再読本もふくめると、結構ある。

再読本では、鴎外の『渋江抽斎』と村上春樹の『羊をめぐる冒険』を挙げたい。
前者は、江戸の文化的奥行きと江戸＝明治の連続性を改めて実感させてくれたし、後者は、1982 年刊行時（大学生の頃）に読んで以来、じつに久しぶりの再読だった（面白かった！）。

初見本はいろいろと迷うが、小川洋子『ことり』、カズオ・イシグロ『忘れられた巨人』、恩田陸『蜜蜂と遠雷』を挙げよう（村上春樹『騎士団長殺し』は、『羊をめぐる冒険』と重複するので割愛する）。『ことり』はいままで読んだなかで一番の小川作品かもしれない。図書館司書との交流がいつまでも心に残る。『忘れられた巨人』は、作者のノーベル賞受賞を聞いて未読のまま書架に眠っていたのを引っ張り出して読んでみたら、その素晴らしい翻訳と相まって、瞬時に作品世界に引き込まれ、ほとんど一日で読了してしまった。でもこの一年の一冊は、やはり恩田陸にしようと思う。

世評高い本で、私が推薦するまでもないような気もするが、恩田陸が苦手な私が最後まで読め手放しに絶賛できた希有な本なので（たぶんこれ一冊だろう、今後もふくめて）、その記念に推薦したい。物語の主筋は、栄伝亜夜の天才少女復活劇なのだろうが、物語の真の主役は、タイトルにもあるように、向こう側の世界から亜夜に呼びかけ挑発する風間塵のピアノである。世界を破壊し創造し保存するピアノ。世界のどこか片隅で（できれば密やかに）聴いてみたいものである。

国際地域学部　国際地域学科　水上　則子

R 帝国

中村文則　中央公論新社(2017 年)

作者の「読みやすいドストエフスキーがあったら最高じゃないですか」という言葉に興味をひかれて読みました。感想をひとことで言うなら「読みやすい」悪夢、でした。そして、世界にあふれる紛争のニュースを見ながらも、心のどこかで、戦争は対岸の出来事であり、自分が生きているこの国には（自分の周囲５メートルには？）現実に起きたりしない、と思っていたことを自覚させられました。その思い込みがどれほどあさはかなものであるかも。もちろんこれは「小説」ですが、このまま「小説」で終わらせることができるかどうか、今に生きる私たち一人ひとりが問われているように思います。

※本学図書館に収蔵されています

特集

動物の本

ルボーク（ロシア民衆版画）「ネズミが猫を埋葬する」18 世紀

人間生活学部　子ども学科　神谷　睦代

アルジャーノンに花束を

ダニエル・キイス　小尾芙佐（訳）　早川書房

筆者が学生時代に出会い、大きな衝撃と感動を得た一冊です。

1966 年にＳＦ長編小説としてダニエル・キイスにより発表されてから、半世紀ほど経た現在では、人工知能に示されるようなテクノロジーの進化によって、物語の世界観は現実に近づいてきました。

主人公であり、32 歳にして幼児の知能しかないチャーリィは、頭がよくなれば幸せになれると考え、科学の力によって天才的な頭脳を手に入れます。読者は、経過報告として綴られるチャーリィの手記から、彼と彼を取り巻く家族、友人や恋人、研究者や職場の仲間など、登場人物それぞれの苦悩や葛藤を目の当たりにします。果たして、高度な知能を持つことで人は幸せになれるのでしょうか。

「アルジャーノンに花束を」のアルジャーノンとは、本物語の中で科学実験に用いられるマウスの名前です。アルジャーノンはチャーリィにとって、立場を同じくする仲間であり、唯一の真の友というべき存在でした。この表題からはチャーリィのアルジャーノンに対する敬愛と鎮魂の思いが伝わってきます。しかし、一方では、科学の進歩の為に、膨大な動物の生命を犠牲にしてきた「人間の傲慢さ」への警鐘としても受け止められます。

筆者は、本書を 4，5 回再読していますが、そのつどジェットコースター的に引き込まれ、新たな発見があります。不朽の名作と呼ばれる所以でしょう。ただ、日本語版では小尾芙佐氏による和訳の力によるところも大きいと思います。幼児から天才まで知能のレベルが文章に反映されており、音的にも視覚的にも伝わる日本語の繊細さと豊かさが味わえます。

※本学の図書館には英語版「アルジャーノンに花束を－原書で楽しむ」（単行本）・「戯曲　アルジャーノンに花束を」（単行本）・日本語版「アルジャーノンに花束を」（愛蔵版）の３冊が所蔵されています。

国際地域学部　国際地域学科　小谷　一明

オオカミ王 ロボ（シートン動物記）

アーネスト・T・シートン　今泉吉晴（訳）　童心社(2010)

5 年程前、野生の狼が主人公の『ロボ』を読んだ。子どもの頃、ドリトル先生シリーズやシートンの絵本を読んでいたが、すっかり忘れていた。読んでいなかったのかも。10 年近く前、サンタフェ近くのシートン博物館に行って、館長さんらの案内でシートン直筆の絵などを見学した。ちょうど電気系統の故障による火事で建物の一部が焼け落ちた後。まだ真っ黒な建材が転がっていた。5 年ほど前、シートン『動物誌』の完訳者、今泉さんを学会でお呼びすることになり、予習で何冊か『動物誌』を買った。面白いこと請け合いなのだが、大きくて重い本のため床に置くとよくつまづいて、足の指を何度も痛めた。今は怪我をしないように家の隅に置かれている。

聖地 Cs

木村友祐　新潮社(2014)

この本には猫の描写が素敵な「猫の香箱を死守する党」という作品が収められている。猫の描き方が、すごくよかった。よくまあ、ここまで猫を見つめられるものだと、ほれぼれとする観察眼。木村さん自身、大の猫好き。最新作を除いてすべて図書館に入っているが、どれもお薦め。今年は猫のカレンダーを私の研究室にかけた。2 月 10 日に逝去された石牟礼道子さんの作品、『水はみどろの宮』のカバーデザインを手がけた山福朱美の「猫ぞろぞろカレンダー」だ。そして、今年の T シャツは「猫 400 号」。水俣でお世話になっている木下ご夫妻(ユニット名は HUNK)のデザイン。猫の一年になりそうだ。

＊図書館にあります

国際地域学部　国際地域学科　石川　伊織

エゾモモンガ――アッカムイの森に生きる――目黒誠一写真集

目黒誠一　講談社(1995 年)

ネズミ目リス科の小動物エゾモモンガは、英名を＜a flying squirrel＝飛ぶリス＞と言います。北海道に住んでいるので「エゾモモンガ」ですが、フィンランドからシベリア、朝鮮半島にかけて生息するタイリクモモンガの仲間で、本州に住むニホンモモンガとはちょっと違うのだそうです。津軽海峡を隔てて、エゾモモンガはフィンランドにつながってる、というわけです。そういえば、津軽海峡の間には公海があって、そこは本当は日本国の一部じゃないんだそうです。だから、あそこに日本以外の国の原子力潜水艦が潜んでいても、日本国は文句が言えないんだとか。青函トンネルも、津軽海峡の一番深いところで日本国じゃないところを通っていて、だから本当はパスポートのチェックが必要だとか……。とはいえ、目黒さんのモモンガの写真はたいへんにカワユイのでした。体長は 13 ㎝、これに 10 ㎝の尾っぽがあります。前脚と後ろ脚の間の皮膚が膜のようになっていて、ここに空気を孕んで滑空します。よく似たリス科の動物にムササビがいますが、これはもっとずっと大きくて、体長が 30 ㎝、尾っぽも 30 ㎝。日本最大のネズミだそうです。だから、モモンガは小っちゃくてカワユイのですね。

国際地域学部　国際地域学科　堀江　薫

寺田寅彦随筆集　第二巻

小宮豊隆（編）　岩波書店（岩波文庫）

物理学者寺田寅彦が書いた上記・随筆集の中に、「子猫」というものがあります。以下のような書き出しからはじまります。猫のことをただ可愛いと言えばよさそうなものなんですが、エライさんは、やっぱりすごくて、やっぱり素直ではない、ということがよくわかります。

> ……これまでかつて猫というもののいた事のない私の家庭に、去年の夏はじめ偶然の機会から急に猫がはいって来て、それが私の家庭の日常生活の上にかなりに鮮明な存在の影を映しはじめた。それは単に小さな子供らの愛撫もしくは玩弄の目的物ができたというばかりでなく、私自身の内部生活にもなんらかのかすかな光のようなものを投げ込んだように思われた。……

随筆の最後の部分は、もっと難解なものです。

> ……私は猫に対して感ずるような純粋なあたたかい愛情を人間に対していだく事のできないのを残念に思う。そういう事が可能になるためには私は人間より一段高い存在になる必要があるかもしれない。それはとてもできそうにないし、かりにそれができたとした時に私はおそらく超人の孤独と悲哀を感じなければなるまい。凡人の私はやはり子猫でもかわいがって、そして人間は人間として尊敬し、親しみ恐れはばかりあるいは憎むよりほかはないかもしれない。……

そして、同書「備忘録」の中の「猫の死」の文末では、以下のように書かれています。わかるような、わからないような…。

> ……小動物を愛するという事は、不幸な弱い人間をして「神」の心をたとえ少しでも味わわしめうる唯一の手段であるかもしれない。……

なお、ネコの写真集だと思って間違って買ってしまった本を一冊紹介しておきます。それは、（監修）加藤朝胤・（文）ひらたせつこ『こだわらニャい　心配しニャい　迷わニャい【ブッダの言葉】』（発売所・リベラル社、発売・星雲社）です。本の表紙や各左側ページのネコの写真が面白くて、例えば、「心静かな一日を」には眠っているトラ猫の写真が載っています。研究室で、いやされたい学生さんや卒業生さんが手にとって見ていますが、たぶん、ありがたいお釈迦様の言葉を解説した文章にはほとんど気がつかないくらいネコの可愛さが伝わってきます。

国際地域学部　国際地域学科　柳町　裕子

ペンギンの憂鬱

アンドレイ・クルコフ　沼野恭子（訳）　新潮社

「夜のキッチン。真っ暗だ。ただの停電だろう。暗闇の中でペンギンのミーシャがのんびり歩きまわる足音がする。ミーシャがここで暮らすようになったのは1 年前の秋から。動物たちにエサをろくにやれなくなった動物園が、欲しい人に譲るというので、皇帝ペンギンをもらってきた。その一週間前に、ガールフレンドが出ていったばかりだった。ヴィクトルは孤独だったけれど、ペンギンのミーシャがそこへさらに孤独を持ちこんだので、今では孤独がふたつ補いあって、友情というより互いを頼りあう感じになっている」―という状況ではじまる小説です。こんな感じで文体も（翻訳も巧みで）読みやすい。舞台は、翻訳者・沼野氏の表現をお借りすると「ソ連が崩壊してウクライナが独立した直後の、犯罪が横行しマフィアの暗躍する「過渡期」の都市キエフ」。そう、深読みしようと思えば、いろいろ読み取れる小説です。主人公ヴィクトルも亡くなった人の追悼文を書く（そしてときどきペンギンと一緒に葬儀に参列する）という不思議な仕事をしています。でもまあ、家のなかをペンギンがペタペタ歩いていたり、朝起きたらペンギンが枕もとで「お腹へった」と立っていたり、凍ったドニエプル川の上で一緒にピクニックしたり、ペンギンとの暮らしをリアルに感じられるのがこの小説のいちばんの魅力。作者クルコフは、ロシア語で作品を発表しているウクライナの作家。この小説でヨーロッパの人気作家となりました。（本学図書館にあります。）

とりぱん

とりのなんこ　講談社

主人公の女性が、岩手の自分の家の庭で野鳥たちにエサをやって観察して、それをネタにマンガを描いている、というだけで 22 巻まで続いている（『モーニング』でまだ連載中の）マンガです。第 1 巻が出た頃、古い友人に「読んだら（私）を思い出した」とプレゼントされ、それから私も読み出しました。（注：私は鳥の餌付けはしてません。）ストーリーとかドラマ性はほとんどなし。でも、今回はどんな鳥来てるかな、今年もあいつら（鳥）来るかな、そうだよねぇ、大雪降るとこうなるよねぇ、とか、（舞台が新潟の気候と似ているということもあって）身近な自然や季節の移り変わりを鳥たちとの小さなドタバタ劇を通して共感できる作品です。このマンガが生んだ人気者は、ツグミのツグミン。夏はシベリアにいて、冬になると日本にやってくる渡り鳥です。でも、堂々とした白鳥とちがって小さい鳥で、気も小さくて（いつもヒヨドリに蹴飛ばされていて）、日本に来ても、お庭や駐車場をただちょんちょんしたり、ときにぼぉっとしたり、とても愛らしいやつです。そのひ弱さから、シベリアから飛んできたとは信じられず、鉄道や船をつかって来ているのでは、と作品の中でも疑われています。県立大の中庭でも春休み中とかにちょんちょんしてますよ。同じく中庭の南東の角にある木ではよくオナガが休んでいます。ツートン模様がかっこいい。あと、近くのガソリンスタンドやコンビニの駐車場で、人や車が来てもなぜか飛ばずにテケテケ走っているハクセキレイに出会ったことがある人はきっと多いはず。このマンガを読むと、身近にいる鳥たちにもっと気付けるようになるでしょう。

国際地域学部　国際地域学科　水上　則子

夜廻り猫

深谷かほる　講談社

　開いてしまうとなかなか閉じられない、という意味で、忙しいときには危険なのですが、心がマイナスに傾きそうな日に、そっと支えてくれる優しい本です。猫は偉大です。そして、こういう作品を描ける人も。

2017 年度卒業・2018 年度入学記念

どこでもドアのかぎ 2018

新潟県立大学生活協同組合

教職員フォーラム　「どこでもドアのかぎ」編集委員会　編

バックナンバーURL:http://www.unii.ac.jp/~ktcoop/dokodemo.html

表紙イラスト　仲佐梨奈

2018年3月22日　発行